

# ミシェル・フーコーの権力論における「生存の技法」 「戦略」と「抵抗」を可能にするエティックとしての「生存の技法」

藤田 博文\*

本稿は、ミシェル・フーコーの権力論に内在するダイナミズム、すなわち権力関係の変動性の要因を捉えることを目的としている。この目的を達成するために、まずはじめに彼の「権力」概念を構成している「戦術」と「戦略」概念の規定と性質を考察することによって、「戦術」概念に対する「戦略」概念の優位性とそのダイナミックな作用を捉えていく。次に、ダイナミックな作用をもっているこの「戦略」の起動力を可能にする要因として、晩年のフーコーが提示したエティックの実践としての「生存の技法」概念を考察していく。そして最後に、この「戦略」概念と「生存の技法」概念との関係、すなわち権力論とエティックの実践との関係を明らかにしていく。これらの点を明らかにすることによって、彼の権力論に内在するダイナミズムを捉えるための、非常に重要な契機をつかまえることができるのである。

キーワード：戦略、対抗戦略、エティック、生存の技法、鍛錬、抵抗

## 目次

はじめに

1. 権力関係の変動を可能にする「戦略」
  - (1) フーコーの「戦術」と「戦略」概念への着目
  - (2) スタティックな関係としての「戦術」
  - (3) ダイナミックな関係としての「戦略」
2. 「戦略」を可能にする「生存の技法」
  - (1) 目的
  - (2) エティックの問題領域への理論的転移
  - (3) 自己の実践」としての「生存の技法」

おわりに 今後の課題に向けて

## はじめに

本稿の目的は、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) がエティックの問題を扱った『セクシュアリティの歴史 快楽の活用』において提示した「生存の技法」概念を考察することによって、彼の権力論において重要な理論的役割を担う「戦略」の起動力を明らかにしていくことである。というのも、この目的を達成することによって、フーコー権力論に内在するダイナミズム、すなわち権力関係の変動性を捉えることができるし、またこのダイナミズムを生み出す要因をつかまえることができると考え

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

るからである。その上、彼の権力論に内在するこのダイナミズムというテーマは、フーコー研究において避けて通ることができない問題であり、これまでも常に問題化されている争点である。

このダイナミズムの問題は、フーコーの「抵抗」概念の理論的位置づけの問題と関わっている。すなわちこの問題は、彼が描く、社会の隅々にまで張り巡らされた「権力」の網の目においていかにして「抵抗」の拠点を確保しうるのかという問題と関わっているのである。さらにこの「抵抗」の拠点を確保の問題は、フーコーの「権力」概念の理論的構成と関わっている。

これまでのフーコー権力論に関する諸研究は、彼の「権力」概念を捉える際に、その「戦術」的な側面や「戦略」的な側面を個々別々に考察してきた。この「戦術」と「戦略」概念を各々明確に規定し、それらの性質や機能を明確に説明し、そしてこれら両概念を関係づけて論じているフーコー研究は存在しない。このようなフーコー研究の状況の中で、拙稿「ミシェル・フーコーの『権力』概念の検討 『規律・訓練』概念を構成する『戦術』と『戦略』概念を中心に」<sup>1)</sup>において「戦術」と「戦略」概念を検討することによって、これら両概念がフーコー権力論の中で明瞭に区別されつつ規定され、それらが明確に関係づけられていることを明らかにし、そして彼の「権力」概念がこれら「戦術」と「戦略」概念を基礎として構成されていることを明らかにした。さらに、このような観点から彼の権力論を捉えることによって、一貫した論理を保ちつつ、彼の「抵抗」概念が彼の理論内部に確保でき、そのことがまさにフーコー権力論のダイナミズムを生み出しうることも明らかにしてきた。上述したこ

れまでのフーコー研究における「権力」概念の理解ではダイナミズムをもった理論としての彼の権力論の可能性が閉ざされてしまい、そしてこれによって、フーコー権力論の研究で従来から争点となっている、「抵抗」概念の理論的位置づけの問題が曖昧にされてきたと考えられる。

このように彼の「権力」概念を構成する、非常に重要な理論的役割をもつ「戦術」と「戦略」概念を捉えることによってこそ、彼の権力論に内在するダイナミズムとしての「戦略」概念の作用性を理解しうるのである。しかしそこで新たな問題が生まれる。それはフーコー権力論のこのダイナミズムを担っている「戦略」の起動性を可能ならしめているものは何かという問題である。結論を先取りすれば、それはフーコーがエティックの問題領域で提示した、「自己の実践」としての「生存の技法」である。まさにこの「生存の技法」こそが「戦略」の起動性を可能にしている要因なのである。さらにこの「戦略」概念と「生存の技法」概念との関係を明らかにすることによって、「抵抗」概念の性質や作用も必然的に明らかになるのである。だからこの「生存の技法」概念は、それを全く独立したものとしてエティックの問題領域だけで捉えるのではなく、「戦術」と「戦略」概念が提示された、権力分析の問題領域との関係の中で捉えられなければならないのである。

そこで本稿では、まずはじめに、「生存の技法」によって「戦略」の起動の可能性を捉えるという観点から、「権力」概念を構成する「戦術」と「戦略」概念をつかんでいく<sup>2)</sup>。次に、フーコー権力論のダイナミズムを担うこの「戦略」概念と「生存の技法」概念の関係を、後者の概念規定や性質を明らかにすることによって考察していく。そして最後に、これまで考察してき

た「生存の技法」概念の性質や機能が、「戦略」概念と同様に「抵抗」概念をも規定していることを指摘する。

## 1. 権力関係の変動を可能にする「戦略」

### (1) フーコーの「戦術」と「戦略」概念への着目

フーコーの「権力 pouvoir」概念は、禁止の体系で構成された法的モデルによってではなく、戦争モデルによって「主体」を産出する「戦術 tactique」と「戦略 stratégie」概念によって構成されている。これら両概念によって構成されている彼の「権力」概念を捉えることは、「はじめに」で述べたように彼の権力論に内在するダイナミズムを捉える上でもっとも重要だと考えられる。

フーコーが「権力」分析において「戦術」と「戦略」という概念はまだ使用されていないが、これら両概念に含意されている考え方を意識したのは、1971年から1972年にかけてである。彼の著書における権力論の展開は1975年を待たなければならないが、彼は1971年から1972年にかけてのコレージュ・ド・フランスにおいて、すでに「権力 - 知 pouvoir-savoir」という観点から19世紀フランスの刑罰制度の研究についての講義（「刑罰理論と刑罰制度」）を行っており<sup>3)</sup>、その研究の結果、「権力」を「戦術」と「戦略」でもって考えることの重要性を確信したのである<sup>4)</sup>。

フーコーがこの「戦術」と「戦略」という解読格子に着目し、これに重要な理論的役割を与えていたことは、彼の雑誌論文、講演、そしてインタビューなどのテキストを読むことによって認識することができる。彼は歴史の方法を説

明しているテキストで次のように述べている。

「問題は、出来事 événements を見分け、出来事が属するネットワーク réseaux とレベルの違いを明らかにすると同時に、出来事を結びあわせ、そして出来事を相互に生み出させる織糸を再構成することなのです。だから、象徴の分野あるいは意味的構造の領域に依拠する分析を拒否しなければならないのであり、また〔逆に〕力の関係、戦略的展開、戦術についての系譜学の分野で行われる分析に依拠しなければならないのです。」<sup>5)</sup>

さらに別のテキストで、彼は歴史の方法について次のように述べている。

「私には、ディスクールの編成や知の系譜学は、意識のタイプ、知覚様式、あるいはイデオロギーの形態からではなくて、権力の戦術と戦略から分析されなければならないと思えてきました。」<sup>6)</sup>

また、フーコーは自分の問題関心について次のように述べている。

「私は、常に批判されると同時に常に再生する監獄という、このパラドシカルな制度の基礎となっている権力の戦術や戦略に関心をもっています。」<sup>7)</sup>

さらに別のテキストで、彼は自分の問題関心について次のように述べている。

「刑罰のケースを研究することによって、それが法律の分野にそれほど存しているわけではなく、〔むしろ〕テクノロジーの分野、戦術や戦略の分野に存していると私は確信しました。また私が『監視することと処罰すること』で取り組もうと試み、さらに『セクシュアリテの歴史』で活用しようと試みたのは、法律的で否定的な解読格子のかわりに、技術的で戦略的な解読格子を用いることであつたのです。」<sup>8)</sup>

このようにフーコーが、権力分析を行う際に「戦術」と「戦略」概念に着目し、それらに非常に重要な役割を与えていたことが理解できるであろう。上に引用したテキストの他にもこれら両概念について述べている著書以外のテキスト、すなわち雑誌論文、講演、インタビューなどのテキストは多数存在するし、また「権力」概念を説明する際にこれら両概念を個々別々に使用している、著書以外のテキストも多くの量が存在する。

しかし、フーコーがはじめて権力論を本格的に展開した、1975年に出版された『監視することと処罰すること 監獄の誕生』<sup>9)</sup>と1976年に出版された『セクシュアリテの歴史

知への意志』<sup>10)</sup>という著書だけを讀んでも、彼の「権力」概念が「戦術」と「戦略」概念を基礎として構成されていることを捉えるのは難しいであろう。というのも、それらの著書は歴史書という形態をとっており、彼の「権力」概念を純粋な理論として体系的に説明していないからである。このことから、彼の権力論に対する大きな誤解、すなわち「はじめに」で述べた彼の権力論における「抵抗」拠点の確保の不可能性という誤解が生じたと考えられる。とはいえ、それらの著書に内在して正確に読み込むことによって、「戦術」と「戦略」概念がそれら著書の中でも展開されていることを理解しうるし、またこれら両概念の解釈格子を通してそれら著書を読むことによって、彼の権力論に内在するダイナミズムを捉えうるのである。そこで次節では、まず、原理的な次元において「戦略」によってはじめて作用する「戦術」を考察していく。

## （2）スタティックな関係としての「戦術」

フーコーが「戦術」概念を体系的に論じたのは、彼が権力論をはじめて本格的に展開した著書である『監視することと処罰すること 監獄の誕生』においてである。彼はこのテキストで問題設定をする際に「戦術」概念に着目している。彼はこのテキストの目的を次のように述べている。

「この著書の目的：近代精神 *à me moderne* と新しい裁判権との相関的な歴史。処罰権がその支柱を入手し、その正当性と諸規則を受け取り、その影響を及ぼし、その途方もない特異性を覆い隠す、こうした今日の科学 - 司法的 *scientifico-judiciaire* な複合体の系譜学〔を行うこと〕。」<sup>11)</sup>

ここで述べられている研究対象を彼の一般的な用語で置き換えると「権力 - 知」であり、彼はこの「権力」と「知」の関係をこのテキストで探求しようと試みたのである。そして彼はこの「権力 - 知」の問題をデュルケム（Émile Durkheim）の論文「刑罰進化の二法則」<sup>12)</sup>との関係の中で設定している。フーコーは次のように述べている。

「デュルケムが行ったように、一般的な社会諸形態しか研究しないならば、われわれは、処罰の緩和の原理として個別化 *individualisation* の諸過程を提示する危険があるが、〔しかし〕その諸過程は、むしろ権力の新たな諸戦術の効果のひとつであり、またそれらの戦術の中でも新たな刑罰メカニズムの効果のひとつである。」<sup>13)</sup>

このように、処罰の緩和の原因は、デュルケムが言うように社会の進化による個別化の諸過程にあるのではなく、この個別化の諸過程を生み出すまさに「諸戦術」の効果のひとつにある

のである。

さらにフーコーは「権力」と「知」の関係を考察していく上で、従うべき「4つの一般的規則 *règles générales*」を提示しており、そのひとつに次の規則をあげている。

「処罰の諸方法を、法規則の単なる帰結として、もしくは社会構造の指標として分析するのではなく、他の権力方式のより一般的な場における特殊性をもつ技術として分析すること。懲罰にたいして政治的戦術のパースペクティブを取り入れること。」<sup>14)</sup>

このように『監視することと処罰すること 監獄の誕生』の問題設定の中で「戦術」概念が非常に重要な位置を占めていることがわかるであろう。

ではこの「戦術」とは何か。「戦術」とは、身体に働きかける「規律・訓練 *discipline*」を構成するひとつの技術 *technique* であり、それは他の諸技術を組み合わせる技法 *art* として作用し、諸身体の諸力の産出をその総和以上に増大させるものである。フーコーは『監視することと処罰すること 監獄の誕生』において「戦術」概念を次のように規定している。

「戦術とは、持ち場の指定された身体、コード化された活動、養成された能力を用いて、様々な諸力の産出がそれら力の計算ずくの組み合わせによって増大される仕組みをつくり上げる技法であって、こうした戦術は規律・訓練実践 *pratique disciplinaire* の最高形式と言ってよいだろう。」<sup>15)</sup>

このように「戦術」とは、フーコー権力論においてまさに「規律・訓練」実践の最高形式として位置づけられているのである。さらにフーコーはこのテキストで「規則・訓練」について

次のように述べている。

「規律・訓練はもはや単に、さまざまの身体を配分し、それから時間を抽出し、かつ累積する技法ではなく、効果的な仕組みを獲得するためにさまざまの力を組み立てる技法となった」<sup>16)</sup>。

また彼は『セクシュアリテの歴史 知への意志』で「戦術」概念を次のように規定している。

「戦術とは互いに連鎖をなし、呼びあい、伝播しあい、自らの支えと条件とを他所に見いだしつつ、最終的には全体的装置 *dispositifs d'ensemble* を描き出すところのものである。」<sup>17)</sup>

このように「戦術」とは、「規律・訓練」を構成するさまざまな諸技術を組みあわせ、身体力を効果的かつその総和以上に引き出す技術/技法なのである。ではこの「戦術」が組み合わせる諸技術とは何を指しているのか。それは「空間の配分 *répartition spatiale*」, 「活動のコード化 *codage des activités*」, そして「時間の累積 *cumul du temps*」である<sup>18)</sup>。したがって「戦術」とはこれら3つの技術を組み合わせることによって全体的権力装置をつくり出す技術/技法なのである<sup>19)</sup>。

フーコーは、このように「戦術」を技術/技法として規定している。もちろんこの「戦術」は歴史概念で、西洋近代において生み出された技術/技法であり、これは、いくつかの技術を組み合わせることで個人を「主体」として産出するという作用をもっている。したがってこの「戦術」とは、次節で論じる、権力関係が常に変動する可能性をもつ「戦略」概念とは異なり、「主体」を産出する技術/技法の関係自体を指した概念であり、その限りにおいて、この「戦術」概念は、権力関係が安定し、固定化したものとして

フーコーの権力論の中に位置づけられているのである<sup>20)</sup>。つまり「戦術」は「対立関係の成就 accomplissement と同時に保留 mise en suspens」として概念化されたものであり、その意味でスタティックな権力関係として見なすことができる。フーコーは、近代西洋社会における「対立関係の成就と同時に保留」という状態、言い換えれば「支配 domination」状態のもとで作用する技術/技法としての「戦術」を提示したのである。したがって「戦術」はスタティックな関係として彼の権力論に位置づけられているのである。次節では、原理的な次元において「戦術」に起動性を与え、さらにダイナミックな関係としての「戦略」、すなわち「不定な連鎖 enchaînement indéfini と永続的な逆転 renversement perpétuel」が常に内包されている「戦略」概念を考察していく。

### （3）ダイナミックな関係としての「戦略」

フーコーの「権力」概念を構成するもう一方の極の概念である「戦略」概念は、「戦術」概念に対してダイナミックな性質をもつ概念として彼の権力論に位置づけられている。彼の著書や著書以外のテキストを見ればわかるように、彼は「権力」概念を説明する際に「戦術」概念以上に「戦略」概念を頻繁に使用するし、またこの概念をもっとも重要な概念のひとつとして捉えている。例えば、彼は「権力」について次のように述べている。

「権力とは、ひとつの制度でもなく、しかもひとつの構造でもないし、ある種の人々がもっているある種の力でもない。それは特定の社会における複雑な戦略的状况に与えられる名称なのである。」<sup>21)</sup>

フーコーの多数のテキストのいたるところで「権力」概念は、上の引用のように「戦略」概念として捉えられているのである。

この「戦略」概念は、彼の「権力」概念においていかなる性質をもつのか。フーコーは「戦略」概念が今日使用される用法を以下の3つにまとめている。

「まず第1に、〔戦略という言葉は〕ある目的 fin に達するために使用される手段の選択を指すために使用される。それはある『目標 objectif』に達するために働いている合理性の問題である。〔次に〕、ある特定のゲームにおいて、ある参加者が、他者がとる行為 action であろうと考え、またその他者が、それが自分のとる行為だと考えていることに関連して行動する agit 仕方を指すために使用される。要するにそれは、人が他者に対して優位に立とうと試みる手法である。最後に、敵対者から闘争の諸手段を奪い、また敵対者を、争いを放棄するよう仕向けるために、ある対決において使用される手続きの総体を指す。だからそれは勝利を獲得するために用いられる諸手段の問題なのである。」<sup>22)</sup>

これら3つの動きは、この対決状況の中で基本的には同時にあらわれる。とはいえ、実際には「戦略は『勝利をもたらす』諸解法を選択によって決定される」<sup>23)</sup>のである。このように彼は「戦略」概念の今日的用法を考察することを通して、この「戦略」の関係性をひとつの「ゲーム jeu」として捉えているのである<sup>24)</sup>。

さらにフーコーは、この「戦略」としての「権力」概念を、多くのテキストで、法的なモデル（法、禁止、制度）に従っている伝統的な権力観との関係で説明している。彼はこの法をモデルとした権力の限界性について次のように述べている。

「まず第1に、それ[権力のメカニズムが限定的に定義されるということ 筆者挿入]はその資源において貧しい権力であり、その方法について儉約的な権力であり、それが利用する戦術において単調な権力であり、創意工夫の能力がない権力であり、そして自分自身を常に繰り返さざるをえない権力だからである。次いでそれは、ほとんど『否 non』という力しかもたないような権力だからである。何もつくりだすことができず、単に限界を提示するのに適している権力は、主として反-エネルギーということになる。(省略)最後にそれは、モデルが主として法律的であり、ただ法の条文と禁止の機能のみを中心に行っている権力だからである。」<sup>25)</sup>

このような伝統的な権力観に対して、フーコーは、近代西洋社会に網の目のように張り巡らされ、「主体」を産出するために、他者の行為 *conduite* との関係において常に変化し、柔軟に作用する、「戦略」(「ゲーム」)としての「権力」概念を提示したのである。

この「戦略」概念を捉えるのにもっとも重要なことは、「権力」を維持したり、また「他者の可能的で、予測不可能で、想定された行為に対して行為の諸様式を構成し」<sup>26)</sup>たりする「権力の戦略 *stratégies de pouvoir*」だけではなく、「権力」の関係性において作用する「対抗戦略 *stratégies d'affrontement*」の理論的位置づけである。「権力」の関係性には、可能的には「闘争の戦略 *stratégie de lutte*」が含まれているのである。つまり「権力」(あるいは「権力の戦略」)は「対抗戦略」や「闘争の戦略」との関係によってはじめて作用しうるし、また逆に、当然のことではあるが、この「対抗戦略」も「権力」との関係の中ではじめて作用しうる。このようにフーコーの「戦略」概念には、まさに「ゲーム」や「戦争」の関係性が含意されているのである。彼はこのような性質をもつ「戦

略」について『監視することと処罰すること 監獄の誕生』で次のように述べている。

「この[権力の 筆者挿入] 微視物理学の研究は、行使される権力が、ひとつの所有物としてではなく、ひとつの戦略として理解され、またその支配の効果が、ひとつの『横領』にではなく、配列、操作、戦術、技術、作用に帰せられると仮定する。また、われわれが、権力のうちに、保持しうるであろうひとつの特権を見抜くよりもむしろ常に緊迫し、常に活動中の諸関係の網の目を見抜くと仮定する。また、われわれが、ある譲渡取引を行う契約、あるいはある領土を占領する征服よりもむしろ、永久に続く戦いをモデルとして権力に与えると仮定する。要するに、この権力が所有されるよりもむしろ行使され、また権力が、支配階級によって獲得され、保持される『特権』よりもむしろ支配階級の戦略的立場の総体的な効果 支配される人たちの立場によって明らかにされ、往々にして更新される効果 であるということ を認めなければならない。他方、この権力は『それを持たない』者たちに純粹にかつ単純に、ある義務あるいはある禁止として強制されるのではなく、権力が彼らを包囲し *investir*、彼らによって、また彼らを通して貫かれる。つまりこの権力は彼らを抛り所にするのである。全くちょうど権力に対する闘争において、今度は彼ら自身が、権力がこちらに加える影響力を抛り所とするように。(下線は筆者挿入)<sup>27)</sup>

また『セクシュアリテの歴史 知への意志』でも「戦略」について次のように述べている。

「それらの力関係が行使される領域に内在的で、かつそれらの組織の構成要素である、力関係の多様性を権力によってまず理解すべきだと思われる。また、絶えざる闘争と衝突によって、それらを変形し、強化し、逆転させるゲーム *jeu* を理解すべきだと思われる。また、これらの力関係が、連鎖ないしはシステムを形成するために、互いの中に

見いだす支え、あるいは逆に、そのような力関係を相互に孤立させるずれ *décalages* [ ないしは『不調和』 筆者挿入 ] や矛盾を理解すべきだと思われる。最後に、これらの力関係がその中で効力を発揮する戦略、その全般的構図ないし制度的結晶が国家機関、法の定式化、社会的ヘゲモニーにおいて具体化されるような戦略を理解すべきだと思われる。」(下線は筆者挿入)<sup>28)</sup>

このように「戦略」概念は、もちろん「権力の戦略」としての関係性を内包していると同時に、「対抗戦略」をも可能的、潜在的 *potentia*, *virtuel* に内包しているのであり、この戦略的な関係こそが、まさにフーコーの「権力」概念を構成するもうひとつの側面なのである。したがって「戦略」概念は、まさに「不定な連鎖と永続的な逆転」を常に内包した概念として、フーコー権力論の中に位置づけられているのである。

これまでフーコーの「権力」概念を構成している「戦術」と「戦略」概念を考察してきた。これら両概念は、それぞれ個々別々に彼の権力論に位置づけられているのではなく、相互に欠くことができない概念として彼の権力論の中で関係づけられているのである。彼はこの関係を「二重の条件づけ *double conditionnement*」として捉えている。彼は『セクシュアリテの歴史

知への意志』において「多様で可動的な権力諸関係」<sup>29)</sup>の諸規則 *règles* のひとつとしてこの「二重の条件づけの規則」を提示しており<sup>30)</sup>、これについて次のように述べている。

「一方と他方の間 [『戦略』にとって媒体としてかつ拠点の役目を果たす精密で微少な戦術的諸関係と『戦略』の総体的な諸作用との間 筆者挿入] には、(一方が微視的であり、そして他方が巨視的である) 2つの異なったレベルのように非連

続性 *discontinuité* があるのではなく、しかしながらまた(あたかも、あるものが他のものの巨大な投影あるいは縮小化でしかなかったように)等質性 *homogénéité* があるのでもない。可能な諸戦術の特殊性によるひとつの戦略の条件づけと、それらの戦術を機能させる戦略的覆い *enveloppe* による戦術の条件づけという二重の条件づけについて考えなければならない。かくして家族における父は、君主あるいは国家の『代行者 *représentant*』ではないし、また君主あるいは国家は、別のレベルでの父の投影では少しもない。家族は社会を再現しないし、また社会も逆に家族を模倣しない。しかし、家族装置は、それがまさに島の *insulaire* であり、別の権力メカニズムに対して異型 *hétéromorphe* なものを有していたので、出生率のマルサスのコントロール、人口増加主義の奨励、性の医学化、そして生殖ではない性の形態の精神医学化のための大規模な『操作 *manceuvres*』の媒体として役立ったのである。」(下線は筆者挿入)<sup>31)</sup>

つまりこの「戦術」と「戦略」の関係は、ある「戦略」を選択することは、「戦術」というある特殊な技術/技法を制約することになり、またある特殊な「戦術」を採用することは、ある特定の「戦略」を制約することになる、という関係である。このように「権力」を「戦術」と「戦略」の関係として見なすことによって、「権力」の柔軟で多様な作用、言い換えればその「ゲーム」としての作用を捉えることができる。すなわち、ある装置(例えば家族)を国家や君主の縮小図ではなく、「島の」で、他の権力諸装置に対して「異型な」ものであったからこそ、その装置を媒体かつ拠点として大規模な「操作」をまさに戦略的に展開することができるのである。したがって、フーコーが提示した「権力」の作用は、まさに「戦術」と「戦略」の「二重の条件づけ」という関係として捉えられなければならないのである。



しかしながら、この「戦術」と「戦略」は、「二重の条件づけ」という関係にあるとはいえ、全く同じ次元で作用するのではなく、原理的なレベルにおいては「戦術」に対して「戦略」が優位性を占めていると言える。というのも「戦術」は、本章の第2節で述べたように単なる技術/技法であり、それは、常に変動の可能性をもっているある特定の「戦略」との関係の中ではじめて特殊に、かつ固有に作用しうるのである。言い換えれば「戦術」それ自体だけの作用は、単なる抽象でしかなく、それはある「戦略」的展開の中ではじめて具体的でかつ歴史的に作用しうるのである。すなわち「戦術」それ自体には、原理的には「権力」の起動性が備わっていないのである。もう一方の「戦略」については、それが特殊な「戦術」の作用

正確に言えば、ある「戦略」によって作用している「戦術」の作用、また「戦略」関係が固定化してしまい、ほとんど無意識に受け入れてしまっている「戦術」の作用に条件づけられているとはいえ、その「戦術」の作用が可能になるのは、原理的にはまさに「戦略」がもっている起動性によってなのである。しかしながら「戦略」が起動性をもっているというのは、あくまでも原理的なレベルにおいてそうなのであって、当たり前のように受け入れられ、惰性化し、安定している権力関係、すなわち「対立関係の成就と同時に保留」という関係においては、多様な可能性をもった「戦略」の展開は、安定した「戦術」の作用によって少なからず規定されることになる。このような権力関係の状態においては、日常化した「権力」の「戦略」性を捉えづらく、さらには「対抗戦略(抵抗)」を顕在化させることが非常に困難になる。そこでフーコーは、複雑に絡まり合った権力関係に

内在している、起動性をもった「戦略」の作用を「戦術」という技術/技法の分析を通して捉えようとした。このように起動性をもつ「戦略」は、原理的なレベルにおいては「戦術」に対して優位性を占めており、その意味で彼の権力論の中に非常に重要な概念として位置づけられている。では、この起動性をもった「戦略」は、いかにしてその起動を可能にしうるのか。次章ではこの問題について考察していく。

## 2. 「戦略」を可能にする「生存の技法」

### (1) 目的

前章で結論に達した、フーコー権力論において優位性を占めている「戦略」は、いかにしてその起動性を可能にしうるのか。言い換えれば「不定な連鎖と永続的な逆転」を常に内包している「権力」の関係性を可能にしうるものとは何か。本章では、この問題に取り組み、フーコーが提示した「戦略」の起動性を可能にしうる要因を探っていく。そしてこの問題に取り組むことによって、フーコーの権力論の中にその要因を組み込むことができ、さらにこのことによって彼の権力論に内在するダイナミズムを捉えることができると考えられる。

### (2) エティックの問題領域への理論的転移

フーコーは「戦略」の起動性を可能にしうる要因、すなわちエティックの実践を探求するのに「予想していた以上に遅れて」<sup>32)</sup> しまったと告白している。それはなぜか。それは、彼がこれまでとは異なる仕方でも思考することを試みたからである。この試み *essai* は、彼にとってのまさに「哲学」的实践だったのである。彼はこのことについて次のように述べている。

「哲学が思考自体に対する思考の批判的働きでないとするならば、今日、哲学 私は哲学的活動について言おうとしている とは何であろうか。自分がすでに知っていることを正当化せずに、別の仕方でも思考することが、いかにして、またどこまで可能であるかを知らうと企てることに哲学の意義があるのではないとすれば、哲学とは何であろうか。（省略）『試み essai』 それは真理のゲーム *jeu de la vérité* における自己自身を変化させる試練 *épreuve* として理解しなければならず、他者をコミュニケーションの目的のために単純化する横領として理解してはいけない こそは、もし少なくとも今日なお哲学が、昔そうであったもの、すなわち思考におけるひとつの『禁欲苦行 *ascèse*』、ひとつの自己訓練 *exercice de soi* であるならば、哲学の生ける本体 *corps* なのである。」<sup>33)</sup>

フーコーはこの「哲学」的实践を「自己自身から離脱すること *se déprendre de soi-même*」であると述べている<sup>34)</sup>。彼はまさにこの「自己自身からの離脱」という「哲学」的实践によって「予想していた以上に遅れて」しまったのである。

この「遅れて」しまったというのは、『セクシュアリテの歴史 知への意志』の出版と『セクシュアリテの歴史 快楽の活用』<sup>35)</sup>、『セクシュアリテの歴史 自己への配慮』<sup>36)</sup>の出版との間の8年間を指している<sup>37)</sup>。この8年間とは、彼の理論的可能性の模索、すなわち「戦略」の起動の可能性を模索していた時期であり、そしてその模索の結果、後者の2つの著書に結実し、そこにおいて「戦略」の起動の可能性を提示しえたのである。

ではフーコーはこれら2つの著書において、「自己自身からの離脱」によっていかなる問題構成を提示したのか。彼はこれまでの自分の研究を振り返って、自らの3つの理論的転移 *déplacement théorique* を認めている。第1は

「知と節合していたディスクリール的实践の諸形態について」<sup>38)</sup>の問いへの転移であり、第2は「権力の行使と節合している多様な諸関係、開かれた戦略、そして合理的な技術について」<sup>39)</sup>の問いへの転移であり、そして最後に、彼は第3の転移として次のように述べている。

「(第3の転移の企てのためには 訳者挿入) 個人が主体として自分を構成し、認識する手だてであるところの、自己との関係の諸形式や諸様式がどのようなものであるのかを探求しなければならない。(省略)つまり『欲望の人間の歴史 *histoire de l'homme de désir*』と呼ばれうるものを照合の領域と探求の分野としつつ、自己の自己との関係や主体としての自己自身の構成における真理のゲームを研究しなければならない。」<sup>40)</sup>

これら3つの理論的転移の問いは、個々別々に全く関係のないものとして設定されているのではなく、顕在的であれ潜在的であれ相互に関連しあっているものであり、したがってこれらの転移は全く関係のない独立した問いへの転移ではなく、これらの問いにおける重点の転移なのである。つまり「知の形成」、「権力システム」、そして「諸個人が主体として自己を認識することができ、またそうすべき時に用いる形式」<sup>41)</sup>という「3つの軸」は、彼の思考において相互に関連しあいながら常に前提となっているのである。フーコーは生前最後のインタビューでこのことについて次のように述べている。

「『狂気の歴史』、『言葉と物』そして『監視することと処罰すること』においては、暗示されている多くのことが、私が問題を提示するその仕方が原因で明確にされえなかったという気がします。私は3つの大きな問題を標定しようと試みました。つまりそれは真理の問題、権力の問題、そして個人行動 *conduite individuelle* の問題です。経験の

この3つの領域は、相互に他の領域との関係でのみ理解しうるものであり、他の領域なしには理解されえないものなのです。以前の著作の中で私を困らせたのは、第3の経験を考慮することなしに最初の2つの経験を考察してしまったことです。<sup>42)</sup>

このようにフーコーの問題構成は、常に「真理の問題」、「権力の問題」、そして「主体の問題(個人行動の問題)」との関係によってつくられているのである。「戦略」の起動性の問題は、まさにこの「主体の問題」において明らかにされるのである。この「主体の問題」は彼の生涯を通じての統一的な研究テーマであった<sup>43)</sup>。彼は、著書を見る限りでは、『セクシュアリテの歴史 知への意志』までは権力論との関係において「主体」を「権力」によって産出される服従主体として捉えていたが、しかし『セクシュアリテの歴史 快楽の活用』と『セクシュアリテの歴史 自己への配慮』ではエティックの問題領域において「主体」を捉えようと試みるのである。すなわち彼は、後者2つの著書において「主体の問題」を、自己による道徳主体の構成の問題、つまり「自己の自己との関係 rapport de soi à soi」の問題として取り扱うのである。彼は「自己自身からの離脱」によって「自己の自己との関係」というエティックの問題を提示したのであり、まさにこの「自己の自己との関係」こそが、「戦略」の起動性を可能にしているのである。そこで次節では、この「自己の自己との関係」というエティックの問題領域においてフーコーが概念化した「生存の技法」概念を考察していく。

### (3)「自己の実践」としての「生存の技法」

フーコーは『セクシュアリテの歴史 快楽の活用』において「生存の技法 arts de l'exis-

tence」という概念を提示した<sup>44)</sup>。この概念はフーコー権力論において非常に重要な理論的位置を占めており、まさにこの概念こそが彼の「戦略」の起動性を可能にしているのである。彼はこの概念を次のように説明している。

「それ[生存の技法 筆者挿入]によって、人々が自分に行為の諸規則を定めるだけでなく、自分自身を変容し、自らの単独的な存在において自分を修正しようと努力し、しかもある種の美的価値をもち、またスタイルのある種の基準 critères に合致するひとつの作品に、自分の生をつくり上げようと努力する cherchent, 熟慮的 réfléchiés で意志的な volontaires 実践を理解しなければならぬ。<sup>45)</sup>

さらに彼は「生存の技法」について次のように述べている。

「(他者の眼からみても自分自身の眼にとっても、そして将来の諸世代のために模範として役立てられるその諸世代の眼に対しても)自分自身の生に可能な限りもっとも美しい形態を与えるためには、その自分自身の生をどのように統治 gouverner すればよいのかを知ることが問題だったのです。こういう点こそが、私が再構成しようと試みたところのことなのです。つまりそれは、自分自身の生の美しさを制作する者 ouvrier として自己自身を構成することを目的とする自己の実践 pratique de soi の形成と発展のことなのです。<sup>46)</sup>

このように「生存の技法」とは、これまでフーコーがディスクール分析や権力分析によって明らかにしてきた他者支配による服従主体やそれへの自発的な服従を意味するのではなく、「熟慮的で意志的な実践」によって自己の生を「統治し」つつ、ある美的な規準 critère<sup>47)</sup>でもって自分の生を変容させていくポジティブな「自己の実践」のことなのである。

フーコーはこの「生存の技法」概念を、古代社会における道徳的分析、つまり「自己の実践」を通じて自己が快楽や欲望との関係の中でいかにして自己自身を道徳的主体として構成していくのかという分析を行うことによって導き出した。彼は古代の道徳的省察において4つの主題群が形成されていることを指摘する。その主題群とは、性的行為の性質、一夫一婦婚の貞節、同性愛的関係、そして純潔であり、彼はこれら主題群を『セクシュアリテの歴史 快楽の活用』と『セクシュアリテの歴史 自己への配慮』で検討していく。前者においては、彼は古代ギリシャのテキスト（「紀元前4世紀」を対象）を参照し、「養生術 Diététique」、「家庭管理術 Économique」、そして「恋愛術 Érotique」という問題軸で検討していく。後者においては、彼はローマ帝政期におけるテキスト（「西暦の最初の2つの世紀」を対象）を参照し、前者に続いて身体への配慮、夫婦の絆 lien、若者愛について検討していく。これら2つの時代の道徳的省察を通してフーコーは、自己によって道徳的主体を構成する技法を取得するために不可欠な「自己の実践」、すなわち「鍛錬 askêsis / ascétique」という概念に着目する。彼はこの「鍛錬」の重要性について次のように述べている。

「いかなる技術も、いかなる職業的技量も、訓練 exercice なしには獲得されえない。『生きる技法 art de vivre / technê tou biou』もまた、自己による自己の調教 entraînement として理解するべき『鍛錬』なしには、身につける apprendre ことができないのである。」<sup>48)</sup>

そこでフーコーは、古典期ギリシャのさまざまなテキストにあらわれる、「自己の自己との

関係」の「態度 attitude」を示す「エンクラティア（克己）enkrateia」という用語に着目する。この「エンクラティア」とは快楽や欲望に支配されないように行う自己統御 maîtrise de soi の形式のことである。フーコーはこの「エンクラティア」について次のように述べている。

「エンクラティアは、節制の条件であり、個人が節制をわきまえる人となるために自分自身に対して行使すべき働きかけ travail や統制 contrôle の形式である。」<sup>49)</sup>

さらに彼はこの特徴について次のように述べている。

「エンクラティアはむしろ、抵抗することあるいは争うことを可能ならしめ、また欲望と快楽の領域において自己の支配 sa domination を確保することを可能ならしめるところの、自己統御 maîtrise de soi のひとつの積極的な形式によって特徴づけられる。」<sup>50)</sup>

この「エンクラティア」には「格闘の関係 rapport agonistique」が含まれており、しかもそれは「自己自身との格闘」という関係の形式をとる<sup>51)</sup>。「すなわち『欲望と快楽』に対して争うこと lutter は、自己と対決すること se mesurer なのである。」<sup>52)</sup>しかし、この自己との関係によって目指すのは、キリスト教において行われていた欲望や快楽の「放棄 renoncement」や「浄化 purification」ではなく、それらの美的「活用 usage」による道徳的主体の構成なのである<sup>53)</sup>。さらに、この「活用」を実践するには、まさに「鍛錬」を必要とするのである。そしてこの「鍛錬」による自己統御は、他者統御と同じ形式をもっている。「自己自身の指導をしっかりとすること、自分の家の管理を行

うこと、国家の統治に参加することは同じタイプの3つの実践」<sup>54)</sup>なのである。だから「鍛錬」は、古代ギリシャにおける「自由民(男性)の教育 *paideia* の一部分」なのである。このように「鍛錬」は、欲望と快楽の「活用」や自己統御と他者統御を可能にするのであり、この理由で「鍛錬」が古代ギリシャの道徳思想において非常に重要な位置を占めていたのである。

さらにフーコーはローマ帝政期の哲学や医学のテキストの中に、古代ギリシャ時代の道徳的省察に見られた「自己の自己との関係」のさらなる強化を見出した。彼はこの強化を「自己陶冶 *culture de soi*」と言っており、自己との関係の技術が帝政期の最初の2世紀において「自己陶冶に関する一種の黄金時代」をむかえたと見なしている。しかしこの強化は、キリスト教の進展に見られる「権威主義的で、いっそう有効な禁止体系」や普遍的な法によってなされたわけではなく、あくまでも自己との関係への注意の強化である。フーコーはこの強化について次のように述べている。

「道徳的省察における性的厳格さのこの増加は、禁止された行為を規定するコードの引き締め形式をとるのではなく、人がそれによって自らの行為の主体として構成される自己との関係の強化という形式をとるのである。」<sup>55)</sup>

さらにこの「自己陶冶」はそれを支える「鍛錬」の強化をも伴う。例えば、この「鍛錬」の特徴は、ひとりで孤独 *solitude* に行われるのではなく、「社会的実践 *pratique sociale*」を通して行われるということである。つまりお互いに助言をしあったりしつつ「鍛錬」を実践するのである。次に、この特徴は、「鍛錬」が「病気 *pathos*」という共通概念でもって哲学だけでは

なく、精神や身体を対象にする医学にも適用され、自己を病める者、あるいはその可能性がある者と認識して「鍛錬」を常に行うということである。3つ目のこの特徴は、「自己の実践」において重要な位置を占める「自己認識 *connaissance de soi*」の手続きの強化である。例えばそれは自己の行いの日々の「検査 *examen*」であり、さらにその思考自体に対する思考の働きかけである。そして最後にこの特徴は、この目標が「自己への帰着 *epistrophè eis heauton*」にあるということである。これは自己への到達であり、われわれの外部に起源をもつ「暴力的で、不確定で、そして一時的な快楽」、すなわち「逸楽 *voluptas*」ではなく、いかなる不安も障害もない快楽であり、「人が自分自身にいたく快楽」に達することを指している。フーコーは「自己への帰着」について次のように述べている。

「この[個人の自己自身に対する 筆者挿入]至上権 *souveraineté* は、自己との関係が単に支配の形式だけでなく、欲望のない、しかも不安のない享受 *jouissance* の形式をとるひとつの経験へ広がっていく。」<sup>56)</sup>

このようにローマ帝政期においては「自己陶冶」、すなわち古代ギリシャの時代において模索された「自己の実践」のさらなる強化、あるいは様式化がなされたのである。ここで重要なことは、繰り返しになるが、この「自己陶冶」が、キリスト教社会におけるように禁止体系や掟という普遍的な形式<sup>57)</sup>を通して徹底的に悪としての快楽を浄化することを目指したのではなく、まさに「自己の自己との関係」によって快楽の「活用」を通して自己を道徳的主体として構成して行くことを目指した、ということである。

これまで、フーコーが『セクシュアリテの歴史 快楽の活用』と『セクシュアリテの歴史 自己への配慮』において考察した古代ギリシャとローマ帝政の時代における道徳的省察の特徴、すなわち「自己への配慮（自己の自己との関係）」<sup>58)</sup>であるエティックの実践の特徴を見てきた。そして彼はこの考察を通じて、上述した、「自己の実践」である「生存の技法」概念とそれを支える「鍛錬」を提示したのである。さらにこの「生存の技法」概念は、彼が歴史分析によって好意的に提示した概念ではなく、「私たちの社会で顕著な重要性を確かにおびてきた諸実践の総体」<sup>59)</sup>として提示されたのである。

ところで、「自己の実践」である「生存の技法」概念がこのように今日重要になってきているにしても、フーコーはなぜこの概念を提示せざるをえなかったのか。その必然性はなにか。それは彼の権力論と深く関わっている。つまり彼の「権力」概念の特質と関わっているのである。

まずはじめに、この必然性は、フーコーがキリスト教のテキストにおける羊飼いと羊の関係の比喩に見出した「司牧者権力 *pouvoir pastoral*」の特質と関係している。この「権力」は、近代西洋社会において作用する「生 - 権力 *bio-pouvoir*」<sup>60)</sup>の原理と由来を歴史的に探求する分析を通じて彼によって提示された概念である<sup>61)</sup>。「司牧者権力」の特質は、本節の註の引用文でも示しているように、「自己の放棄 *renoncement à soi*」をめざすことにある<sup>62)</sup>。この「自己の放棄」をめざすのは、万人が「救済 *salut*」されなければならない、つまり「救済」が義務づけられているからであり、そして来世において「救済」されるためには、「告白」という技術によって自己に内在する悪しき欲望

の「浄化」を行わなければならないからである。そこでフーコーは、この「自己の放棄」に対して、キリスト教社会において「司牧者権力」が展開する以前の古代ギリシャと帝政ローマの時代において見出したエティックの実践、すなわち欲望や快楽を「放棄」するのではなく、それらを「活用」して道徳的主体を構成する「自己の実践」である「生存の技法」というエティックの実践を提示したのである。

そして最後に、フーコーが「生存の技法」概念を提示せざるをえなかったその必然性は、前章で考察した彼の「権力」概念を構成している「戦術」と「戦略」概念と関係している。特に「戦術」に対して優位性を占めている「戦略」概念との関係は重要である。この「戦略」概念の特徴は、「権力の戦略」と「対抗戦略」（あるいは「闘争の戦略」）との関係性であり、この関係性は法的な関係ではなく、「戦争」や「ゲーム」という関係、つまり相互に他者の行為との関係において常に変化し、柔軟に作用するという関係である。したがって「権力の戦略」と「対抗戦略」は「不定な連鎖と永続的な逆転」を常にもった内的な関係であり、それらは相互に必要な不可欠な関係としてフーコー権力論の中に位置づけられているのである。

そしてこの「戦略」概念においてフーコーが着目し、もっとも重視するのが「対抗戦略」という概念である。この「対抗戦略」は、常に、「戦略」概念の中に可能的、潜在的に位置づけられている。しかし彼が提示した「権力」（あるいは「戦略」）は、前章でも引用したように「他者の可能的で、予測不可能で、想定された行為に対して行為の諸様式を構成する」よう作用するため、快楽や欲望に支配された行為は、「権力」の外部に排除されるのではなく、容易

に「権力」に絡め取られてしまうのである。つまりそれらに支配されればされるほど、「権力」によって人は服従の「主体」として構成されてしまうのである。だから「対抗戦略」が顕在的に作用するためには、「権力の戦略」の作用に対して自覚的で、意識的でなければならない。そこで「権力」に対して自覚的で、意識的であるためには、社会に網の目のように張り巡らされた「権力」によって自己がいかなる「主体」として産出されているのかということについての分析・検証をすると同時に、「権力」に対して自己が自分自身をいかなる「主体」としてつくり上げていくべきかという問題に取り組まなければならない。すなわち、この前者における権力分析と後者におけるエティックの実践は、同時に行われなければならないのである。なぜなら私たちの社会において複雑に絡まり合った「権力」の作用は、エティックの実践という自由な主体的獲得の過程の徹底的な反省性によってしか明らかにならないし、またエティックの自由な実践は、「権力」(「戦術」と「戦略」)の作用をつかむことによってこそ可能になるからである。だからこの意味において、エティックの実践をとまなわない権力分析、また逆に権力分析から切り離されたエティックの実践は、単なる幻想でしかないし、また形而上学でしかないのである<sup>63)</sup>。したがってフーコーは、1980年代に入って本格的にエティックの問題に取り組むことになる。そして彼は、キリスト教の「権力」が進展する以前の古代ギリシャと帝政ローマの時代におけるエティックの考察を通じて、「私たちの社会で顕著な重要性をおびてきた実践の総体」としての「自己の実践」、すなわち「生存の技法」という概念を提示したのである。この「生存の技法」、すなわち「熟慮的で意志

的な実践」によって自己の生を「統治し」つつ、ある美的な規準でもって自分の生を変容させていくポジティブな「自己の実践」こそが、権力の作用を確実に捉えることを可能ならしめるのだし、またこの「自己の実践」こそが、「対抗戦略」の起動性を可能ならしめるのである。したがって、フーコーの「権力」概念を構成する「戦略」概念の起動性は、「自己の自己との関係」である「生存の技法」によってはじめて可能になるのである。このことから権力分析からエティックへの理論的転移は、彼にとって必然的であったのである。

またフーコーが述べている「抵抗 *résistance*」概念も「対抗戦略」概念と同じ意味で使用されている。フーコーは「権力」と「抵抗」との関係について次のように述べている。

「権力の諸関係は可動的で、可逆的で、そして不安定なものです。(省略)権力の諸関係においては、抵抗の可能性が必ずあります。というのは、抵抗の可能性 暴力的な抵抗・逃走や策略・状況を逆転させる戦略の可能性 がなかったとしたら、権力の諸関係はまったくありえないからです。」<sup>64)</sup>

このように「抵抗」概念は「対抗戦略」と同義で使用されているのである。つまり「抵抗は権力を構成する戦略的關係のひとつの要素」<sup>65)</sup>として彼の権力論に位置づけられているのである。このことから「権力」(あるいは「権力の戦略」)と「抵抗」は、内的関係(「ゲーム」関係)として関係づけられているのである。「はじめに」でふれた「抵抗」の拠点の確保の問題は、まさにこの点から説明できるのである。さらに「抵抗」の起動性も、それが「対抗戦略」と同義で使用されていることから、「自己の実

実践」である「生存の技法」によってはじめて可能になるのである。フーコーは、ある質問者の次の問い、つまり「あなたは抵抗がただの否定ではない、つまりそれは創造の過程 *processus de création* であると理解していますね。つまり創造することと再創造すること、状況を変えること、この過程に積極的に参加すること、それが抵抗することだというわけですね<sup>66)</sup>」という問いに対して、「はい、私はそのように定義したいと思います<sup>67)</sup>」と答えており、そういう意味では「創造の過程」とはまさに「生存の技法」の言い換えなのである<sup>68)</sup>。

このように「対抗戦略」も「抵抗」も、「生存の技法」によってはじめて起動性をもちうるし、その限りにおいて後者が前者を規定するのである。したがってフーコーが取り組んだエティックの問題については、それを独立させて論じるのではなく、彼の権力論との関係において論じられなければならない。そしてそうすることによって、彼の権力論のダイナミズムを捉えることが可能になるのである。

### おわりに 今後の課題に向けて

本稿では、まず最初に「戦術」と「戦略」概念の規定、作用、そして性質と、前者に対する後者の優位性を考察した。次に、古代ギリシャと帝政ローマの時代におけるエティックの実践である「自己の実践」を考察し、そしてこの考察を通してフーコーが提示した、今日重要性をおびてきている「生存の技法」概念を規定した。そして最後にエティックの実践である「生存の技法」概念がフーコー権力論にとって不可欠なものであり、まさにこのエティックの実践こそが「対抗戦略」と「抵抗」の起動性を可能

にし、さらに彼の権力論のダイナミズムを作動させるということを見てきた。エティックの実践が「抵抗」概念と関わっているという論考は、最近のフーコー研究においては、常識となつている。しかし、エティックの実践が彼の権力論とどのように関係しているか、つまり「権力」概念についての概念分析を通してエティックの実践がそれら諸概念とどのように関わっているのかということ、フーコー権力論のダイナミズムを捉えることを試みつつ、考察した研究はこれまでに存在してない。そこで本稿では、彼の権力論のダイナミズムを捉えるための第一歩として、彼の「権力」概念の主要な構成要素のひとつである「戦略」概念とエティックの実践である「生存の技法」概念との関係を考察し、後者が前者の起動性を可能にするということを目指した。

しかしフーコー権力論の研究については、まだ多くの課題が存在する。本稿での考察に関連した大きな課題として次の3点をあげることができる。ひとつは、古代ギリシャ・ローマ時代におけるエティックの実践と、今日重要性をおびてきている「生存の技法」との関係、すなわちそれらの同一性と差異性を明確にするという課題である。次に、「抵抗」とそれを担う『特殊領域の』知識人と、「生存の技法」との関係性を明確にし、後者との関係で前者2つの概念がいかなる作用をするのかという問題である。そして最後にフーコーが最晩年に考察し、古代ギリシャの文献に見出した「パレーシア *par-rhesia*（真理を語る）」概念の検討である。もちろんこれは普遍的な真理を語るのではなく、自分の信じたことを語ることであり、「真理」を語ることによって「戦略」関係（ゲーム）に参加することを意味しているのである。そこ



でこの「パレーシア」概念と「生存の技法」概念がいかなる関係で結ばれているのかという課題が残されている。これら3点の大きな課題に今後取り組むことによって、さらにフーコー権力論に内在するダイナミズムをさらに深い次元で捉えることができるし、またさらに強く根拠づけることができると考えられる。

#### 註

- 1) 拙稿(2000),「ミシェル・フーコーの『権力』概念の検討 『規律・訓練』概念を構成する『戦術』と『戦略』概念を中心に」『立命館産業社会論集』第36巻,第2号。
- 2) 「戦術」と「戦略」概念については,上掲拙稿において詳細に論じているので,第1章では,第2章で考察する「生存の技法」概念の理論的役割を考察するのに重要だと考えられる範囲で,新たな資料や新たな論点を踏まえながら「戦術」と「戦略」概念を考察していく。
- 3) Michel Foucault (1989), *Résumé des cours 1970-1982*, Paris, Julliardを参照。
- 4) Michel Foucault (1977), *Les rapports de pouvoir passent à l'intérieur des corps*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald, Paris, Gallimard, p.229 (山田登世子訳(2000)),「身体をつらぬく権力」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房,302頁)を参照。この1971年は,フーコーの「権力」概念を研究する上で重要な年代であり,彼はこの年に発表した「ニーチェ・系譜学・歴史」においてニーチェの提示した「系譜学」を吸収することによって「戦術」と「戦略」という考え方を提示している。この点については拙稿(2000)を参照のこと。
- 5) Michel Foucault(1977), *Entretien avec Michel Foucault*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.145 (北山晴一訳(2000)),「真理と権力」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房,196頁)なお引用文中の[...]は,訳者(筆者)の補足を指す。
- 6) Michel Foucault (1976), *Questions à Michel Foucault sur la géographie*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.39 (國分功一訳(2000)),「地理学に関するミシェル・フーコーへの質問」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房,47頁)。この引用文中の「知の系譜学」が,上の邦訳テキストでは「知の考古学」と訳されており,原典に従うとこれは明らかに誤訳である。
- 7) Michel Foucault (1976), *Michel Foucault, l'illégalisme et l'art de punir*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.87 (石岡良治訳(2000)),「ミシェル・フーコー,違法性と処罰術」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房,109頁)
- 8) Michel Foucault(1977), *Les rapports de pouvoir passent à l'intérieur des corps*, *art.cit.*, p.229 (302頁)
- 9) Michel Foucault(1975), *Surveiller et punir : Naissance de la prison*, Paris, Gallimard (田村俣訳(1977)),『監獄の誕生 監視と処罰』新潮社)
- 10) Michel Foucault(1976), *Histoire de la sexualité 1 : La volonté de savoir*, Paris, Gallimard (渡辺守章訳(1986)),『性の歴史 知への意志』新潮社)
- 11) Michel Foucault(1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, *op.cit.*, p.27 (27頁)。
- 12) Émile Durkheim(1901), *Deux lois de l'évolution pénale*, (1969) *JOURNAL SOCIOLOGIQUE*, Paris, PUF (織田年和訳「刑罰進化の二法則」,作田啓一『デュルケム』講談社,1983年)
- 13) Michel Foucault(1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, *op.cit.*, p.28 (27頁)。「監視することと処罰すること 監獄の誕生」の邦訳テキストでは,引用文中の「諸戦術」の箇所が「諸策略」と訳されているが,原語は *tactiques* と記されているのでそこは「諸戦術」と訳すべきであろう。というのも「諸策略」という訳語には「戦略」のニュアンスも含まれているため,「戦術」と「戦略」との区別が曖昧になるからである。
- 14) *Ibid.*, p.28 (28頁)。他の3つの一般的規則につ

いては次のように述べられている。「1. 処罰のメカニズムの研究を 抑圧的な その効果のみに、サンクション の側面のみに集中するのではなく、そのメカニズムを、たとえ一見して周辺の効果であっても、それが導き出しうる一連の積極的な効果すべての中に置き直してみること。したがって処罰を複合的な社会的機能として捉えること。2. (本文に引用しているため省略)。3. 刑法の歴史と人間諸科学の歴史を分離される2つの系列、つまりその交わりが、どちらか一方あるいは両方に対して有害性もしくはは有益性を有しているであろう、そうした2系列として取り扱う代わりに、(2つの系列の)ひとつの共通母体 *matrice commune* がないかどうか、また2つの系列が両方とも「認識論的-法律的 *épistémologico-juridique*」なひとつの形成過程に属していないかどうかを探求すること。要約すると権力のテクノロジーを、刑罰の人間化と人間の認識との原理に位置づけること。4. 刑事司法という舞台への精神のこうした登場が、またそれとともに、司法的実践の中へのひとつの 科学的な 知の全体の組み込みが、権力関係によって身体自身が包圍 *investi* される仕方におけるひとつの変化の結果ではないかどうかを探求すること。」(Michel Foucault(1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, *op.cit.*, p.28(27-28頁).)

15) *Ibid.*, pp.169-170(169-170頁).

16) *Ibid.*, p.166(166頁).

17) Michel Foucault(1976), *Histoire de la sexualité 1: La volonté de savoir*, *op.cit.*, p.125(122-123頁).

18) 「戦術」という「力の組立 *composition des forces*」以外のこれら3つの技術は次のような機能をもっている。「空間の配分」とは、身体を「序列 *rang*」における「閉鎖空間」、つまり「横の列と縦の列が交わる地点」に位置づけ、身体を個別化し、個々人に対して観察可能にすることであり、この技術は「一覧表 *tableaux*」と呼ばれている。次に「活動のコード化」とは、身体の動きを綿密に制御 *contrôler* することである。これに関して彼が特に重視しているのは身体 = 客体の連結関係 *articulation* を打ち立てるこ

とであり、言い換えれば「動かすべき身体の諸要素(右手,左手,手のさまざまな指,膝,目,肘など)の系列と,操作する客体の諸要素(銃身,照門 *crante*,撃鉄,ボルトなど)の系列」との連結関係を打ち立てることである。したがって「権力は,身体 = 兵器,身体 = 道具,身体 = 機械という一種の複合 *complexe* をつくり上げる」(Michel Foucault(1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, *op.cit.*, p.155(157頁).)のである。このような統治法(つまり技術)を「操練 *manœuvres*」と呼ぶ。そして最後に「時間の累積(「段階的形成の編成 *l'organisation des genèses*」ともいう)」とは、時間の流れを調整された各段階に分割し、その各段階に各人を配置し、試験 *épreuve* でもってその段階の終局とするというものである。そして各段階では、各人に適する訓練を「彼の水準,年功,位階に応じて各人に定め」られるのである。この技術は「訓練 *exercices*」と呼ばれる。

19) フーコーは「戦術」について説明する際に「技術 *technique*」と「技法 *art*」を区別して使用している。一方の「技術」は、身体の細部にまで働きかける作用をもっており、その意味でそれは分析的に作用する性質を持っている。他方の「技法」は、さまざまな諸技術を組み合わせるといふ作用をもっており、その意味でそれは総合的に作用する性質をもっている。

20) ここで注意しなければならないのは、「戦術」と「戦略」概念はそれぞれ実体概念ではなく、分析概念であるということである。したがってそれらは個々に自立した概念ではなく、実際にはそれら相互が絡み合ってはじめて作用しうるのである。「戦術」と「戦略」概念の関係については次節を参照のこと。

21) Michel Foucault(1976), *Histoire de la sexualité 1: La volonté de savoir*, *op.cit.*, p.123(120-121頁).

22) Michel Foucault(1982), *Le sujet et le pouvoir*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.241(山田徹郎訳(1996),『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を越えて』筑摩書房, 305頁).「なぜ権力を研究するのか 主体の問題」の章はフーコーによって英語で書かれており、

- また「いかにして権力は行使されるか」の章はレスリー・ソーヤ (Leslie Sawyer) によってフランス語から英訳されているため、前者の章を参照した場合は英語版を、また後者の章を参照した場合はフランス語版を記すことにする。なお、引用文中の傍点は、原文においてはイタリアック体で記されていることを指す。
- 23) *Ibid.*, p.241 (305頁).
- 24) また「戦略」的關係について、別のテキストで次のように述べている。「他者あるいは他者たちの操作を賭け金とする諸關係であり、また状況、それら諸關係が展開される制度的な枠組、社会的諸集團、時代に応じて、様々な方法や技術に訴えるところの諸關係」であると (Michel Foucault(1981) *Subjectivité et vérité*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.214 (石田英敬訳(2001),「主体性と真理」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房, 444頁)。) また彼はこの「戦略」の關係性を「ゲーム」だけではなく「戦争」,「格闘 agonisme」,そして「闘争 lutte」としても表現している。
- 25) Michel Foucault(1976), *Histoire de la sexualité 1 : La volonté de savoir*, *op.cit.*, pp.112-113 (111頁).
- 26) Michel Foucault(1982), *Le sujet et le pouvoir*, *art.cit.*, pp.241-242(305頁).
- 27) Michel Foucault(1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, *op.cit.*, pp.31-32(30-31頁).
- 28) Michel Foucault(1976), *Histoire de la sexualité 1 : La volonté de savoir*, *op.cit.*, pp.121-122 (119-120頁).
- 29) *Ibid.*, p.129 (126頁).
- 30) フーコーは「二重の条件づけの規則」の他に、3つの規則を提示している。それは「内在性の規則」,「継続的多様性の規則」,そして「ディスクールの戦術的多義性という規則」である。これら3つの規則については、*ibid.*, pp.129-135 (126-131頁)と前掲拙稿(146-147頁)を参照のこと。
- 31) Michel Foucault(1976), *Histoire de la sexualité 1 : La volonté de savoir*, *op.cit.*, p.132(129頁).
- 32) Michel Foucault(1984), *Histoire de la sexualité 2 : L'usage des plaisirs*, Paris, Gallimard, p.9 (渡
- 辺守章訳(1986),『性の歴史 快楽の活用』新潮社, 9頁).
- 33) *Ibid.*, pp.14-15(15-16頁).
- 34) フーコーはまた「自己自身からの離脱」を知識人の存在理由として提示している。「おそらく、ひとりの知識人のエティックとは 私は、現代という時代に人々に吐き気を催させるように思える知識人というこの用語を要請します , そうである以外に何であるのでしょうか。つまり自己自身から離脱することを恒久的に自分に可能にすること以外に何であるのでしょうか(このことは改宗という態度とは正反対のものです)。(省略) 大学教員であると同時に知識人でもあるということは、他者の思想だけではなく、自分自身の思想をも変えるような仕方、大学で教えられ、認められているあるタイプの知や分析を作用させようと試みることなのです。自分自身の思想と他者の思想の変革の仕事が、知識人の存在理由であると私には思われるのです。」(Michel Foucault(1984), *Le souci de la vérité*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.675 (湯浅博雄訳(2002),「真実の気遣い」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房, 165頁)。)
- 35) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, *op.cit.*
- 36) Michel Foucault(1984), *Histoire de la sexualité 3: Le souci de soi*, Paris, Gallimard (渡辺守章訳(1987),『性の歴史 自己への配慮』新潮社).
- 37) 前者は1976年に、後者の2つの著書は1984年に出版された。
- 38) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, *op.cit.*, p.12(12頁).
- 39) *Ibid.*, p.12 (12頁).
- 40) *Ibid.*, p.12 (12-13頁).
- 41) *Ibid.*, p.10 (11頁).
- 42) Michel Foucault(1984), *Le retour de la morale*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.697 (増田一夫訳(2002),「道徳の回帰」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房, 200-201頁).
- 43) Michel Foucault(1982), *The Subject and Power*, (1983) Hubert L. Dreyfus and Paul Rabinow, *Michel Foucault : Beyond Structuralism*

- and Hermeneutics*, se. ed., Chicago, The University of Chicago Press, p.209 (山田徹郎訳 (1996), 『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を越えて』筑摩書房, 287頁)を参照のこと。
- 44) フーコーは「生存の技法」を「自己の技術 techniques de soi」とも言っている。
- 45) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, op.cit., pp.16-17(18頁).
- 46) Michel Foucault(1984) *Le souci de la vérité*, art.cit., p.67(160頁).
- 47) フーコーは「自己の自己との関係」について述べる際に、よく芸術や美という用語を使用する。このことについて彼は次のように述べている。「私を驚かせることは、私たちの社会において、芸術がもはや事物 objets としか関係しておらず、諸個人または生と関係していないということです。そしてまた、芸術が特殊なひとつの領域であり、芸術家という専門家たちの領域であるということも私を驚かしました。しかしすべての個人の生は、ひとつの芸術作品でありうるのではないのでしょうか。なぜ、ひとつの画布あるいは家は芸術の対象 objets であって、私たちの生はそうではないのでしょうか。」(Michel Foucault(1984) *À propos de la généalogie de l'éthique : un aperçu du travail en cours*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.617 (守中高明訳 (2002), 「倫理の系譜学について 進行中の作業の概要」『ミシェル・フーコー 思考集成』筑摩書房, 81頁).)
- 48) Michel Foucault(1983) *L'écriture de soi*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.417 (神崎繁訳 (2001), 「自己の書法」『ミシェル・フーコー 思考集成』筑摩書房, 279頁).
- 49) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, op.cit., p.7(81頁).
- 50) *Ibid.*, p.75(79-80頁).
- 51) ここで使用されている「agonistique(格闘的)」という用語は、「主体と権力」というテキストにおいても権力の「関係性」を説明する際に「agonisme(格闘)」として使用されている(Michel Foucault, *Le sujet et le pouvoir*, art.cit., p.23(302頁)を参照)。
- 52) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, op.cit., p.79(84頁).
- 53) フーコーはアルティスポス(Aristippe)の次の警句を引用している。「もっともよいことは、快楽によって打ち負かされないで、快楽を支配することだ。それは快楽に頼らないということではない。」(*ibid.*, p.82(86頁).)他方、キリスト教においては、反対に、快楽の「放棄」と「浄化」を目的とするのである。
- 54) *Ibid.*, p.8(93頁).
- 55) Michel Foucault(1984) *Histoire de la sexualité 3: Le souci de soi*, op.cit., p.5(57頁).
- 56) *Ibid.*, p.85(90頁).
- 57) フーコーはキリスト教社会における道徳の特徴について次のように述べている。「この道徳は、自己との関係の別の諸様式を規定するであろう。すなわち〔それは〕有限性、失墜墮落、そして悪を出発点とした倫理的実質の特徴づけであり、同時に人格神の意志でもある一般的な法への、服従という形式における隷属の様式であり、心の解釈と欲望の浄化的解釈学を意味する、自己に対するあるタイプの働きかけであり、自己の放棄をめざすエティックの完成の様式である。」(*ibid.*, p.27(313頁).)
- 58) この「自己への配慮 *souci de soi*, *epimeleia heautou*(ギリシャ語) *cura sui*(ラテン語)」という用語は、非常に広い意味で使用されている。「自己統御」と「自己陶冶」という用語は、それぞれ古代ギリシャと帝政ローマの時代を特徴づける用語として使用されているが、「自己への配慮」については、2つの時代をまたいでより広義に使用されている。
- 59) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, op.cit., p.1(18頁).
- 60) 「生 - 権力」は、フーコーの「権力」概念の中でもっとも重要な概念であり、それはミクロのレベルで作用する、身体を対象とする「規律・訓練 *discipline*」と、マクロのレベルで作用する、人口を対象とする「調整 *régulation*」との両極を引き受けたところの権力のことである。この「生 - 権力」については、主に Michel Foucault(1976) *Histoire de la sexualité 1: La*

- volonté de savoir, op.cit.*と、Michel Foucault (1997) *Il faut défendre la société*, Cours au Collège de France (1975-1976), édition établie sous la direction de François Ewald et Alessandro Fontana, par Mauro Bertani et Alessandro Fontana Paris, Gallimard / Seuilを参照。
- 61) この「司牧者権力」の分析については、Michel Foucault (1979) *Politics and Reason*, (1988) Lawrence D. Kitzman ed., *Politics, Philosophy, Culture: Interviews and other writings of Michel Foucault, 1977-1984*, London, Routledge, pp.57-85 / (1979) *Omnes et singulatim : vers une critique de la raison politique*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , pp.134-161 (田村俣訳 (1987)), 「全体的かつ個別的に 政治理性批判をめざして」『現代思想』第15巻, 第3号, 56-77頁)を参照のこと。
- 62) この「自己の放棄」とフーコーの「権力」概念との関係については、拙稿(2002), 「ミシェル・フーコーの『権力』概念の特質 『調整』, 『生 - 権力』, そして『司牧者権力』の概念分析を通して」(『立命館産業社会論集』第38巻, 第3号)を参照のこと。
- 63) 権力の分析とエティックの実践のこの分離不可能な関係は、「解放の過程 *processus de libération*」の考え方にあらわれている。フーコーはそれについて次のように述べている。「私は解放の一般的な主題に関しては常に多少警戒してきました。かなりの用心をし、ある制限の内部でその主題を取り扱わない限りにおいて、その主題が、いくつかの歴史的、経済的、そして社会的な諸過程の結果、抑圧のメカニズムによって、そのメカニズムの中に隠蔽され、疎外され、あるいは閉じ込められてしまったところの人間の本性や内奥 *fond* が存在するという思考に〔私たちを〕差し向ける恐れがあります。この仮説において、人間が自分自身と和解し、自分の本性を再発見し、あるいは自分の起源との接触を取り戻し、そして自分との完璧で積極的な関係を回復するためには、この抑圧的な門 *verrous* を吹き飛ばしてしまいさえすれば十分でありましょう。(省略) だから私は解放の諸過程ではなく、自由の諸実践を強調します。もう一度言いますが、解放の諸過程はそれ自身の〔存在する〕場所をもっていますが、しかしそれだけでは自由の実践の形態のすべてを明らかにすることができるとは思いません。」(Michel Foucault (1984) *L'éthique du souci de soi comme pratique de la liberté*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , pp.709-710 (廣瀬浩司訳 (2002)), 「自由の実践としての自己への配慮」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房, 220頁。)そして彼は「自由の諸実践」というエティックについて次のように述べている。「解放は新たな権力関係のための場を開きますが、問題は、その新たな権力関係を自由の諸実践によってコントロールすることなのです。」( *ibid.*, p.711, 222頁) このようにフーコーの権力分析にとって、エティックの実践は欠くことができないものなのである。
- 64) Michel Foucault (1984), *L'éthique du souci de soi comme pratique de la liberté*, *art.cit.*, p.720(234頁)。
- 65) Michel Foucault (1984) Michel Foucault, *une interview : sexe, pouvoir et la politique de l'identité*, (1994) *DITS ET ECRITS*, Tome , p.741 (西兼志訳 (2002)), 「ミシェル・フーコー, インタビュー 性, 権力, 同一性の政治」『ミシェル・フーコー思考集成』筑摩書房, 263頁)。
- 66) *Ibid.*, p.741(262頁)。
- 67) *Ibid.*
- 68) 「抵抗」概念の性質やその作用性については、紙数や本稿の目的を考えるとこれ以上論じることができない。この概念については、フーコーの著書ではあまり論じられていないので、雑誌論文、講演、そしてインタビューなどからその概念の規定、作用、そして性質などを整理していかなくてはならない。なお、フーコー研究において常に問題になっている「抵抗」概念の拠点の確保の問題、「プログラミング」の問題、そして「抵抗」を担う「『特殊領域の』知識人 *intellectuel spécifique*」については、拙稿(2000), 「ミシェル・フーコーの『権力』概念の検討 『規律・訓練』概念を構成する『戦術』と『戦略』概念を中心に」を参照のこと。

## The “Arts of Existence” in Foucault’s Theory of Power: The “Arts of Existence” as “Strategy” and “Resistance”

FUJITA Hirofumi \*

**Abstract:** This paper aims to investigate the most important factor of the dynamics of the power relations in Foucault’s theory of power, that is to say, the change of the power relations in that theory. To attain this aim, the following three issues have to be examined in accordance with Foucault’s logic

First, this paper clarifies the definition and the characteristics of the concepts of “tactics” and “strategy”, by which Foucault composed his concept of “power” and developed his theory of power. Through this clarification, I intend to point out that the concept of “strategy” holds a dominant position over the concept of “tactics” in principle with regard to the function of the “power”. In short, I would like to prove characterization of the “strategy” as dynamic relations, and the “tactics” as static relations.

Secondly, this paper analyzes the concept of “arts of existence” with which Foucault deals in his last two works published in 1984: *Histoire de la sexualité 2 : L’usage des plaisirs* and *Histoire de la sexualité 3 : Le souci de soi*. This concept of “arts of existence” that he found out in the ancient texts and conceptualized means the ethical practices as “relations of the self to the self”, that is to say, “practices of the self” which enable the individual to constitute himself as an ethical (moral) subject. And these “arts of existence” that are “practices of the self” can be practiced by the “ascetics (askêsis)” as a exercise of the self. By this analysis, I would like to prove that it is these “arts of existence” as “ascetics” that constitute the most important factor of the dynamics of the power relations in Foucault’s theory.

Finally, this paper investigates therefore the relation between “strategy (including ‘confrontation strategy’, in other word, ‘resistance’)” and “arts of existence”, that is to say, between the problem of the power and that of the subject(that of the ethics)in Foucault’s problematization. Through this investigation, I would like to demonstrate that two concepts, namely the concept of “strategy” as a problem of the power and that of “arts of existence” as a problem of subject are mutually indispensable for Foucault’s analysis of “power” or subject.

**Keywords:** strategy, confrontation strategy, ethics, arts of existence, ascetics, resistance

---

\* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University